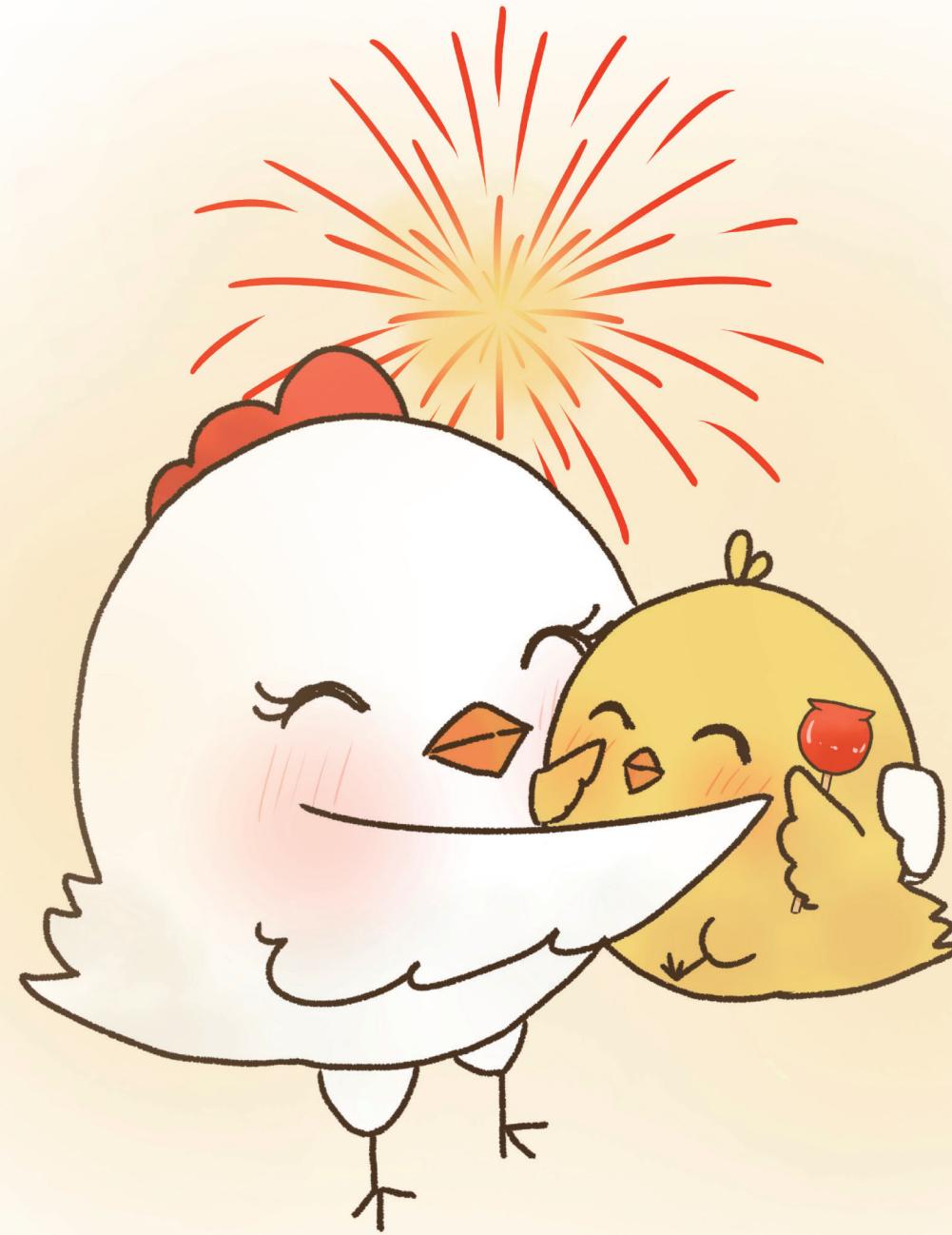


ひーくんと夏祭り



文／藤井知貴
絵／早田明日香

「ひーくん、はぐれないよ！」にしつかりママと手をつなぐ「ね

「わかった！」

二九三

ひへんにいのせたるのせは

「約束ねばえてじる？」

うん、
だいじょうぶ！
ママからはなれない、
だよね！」

〔元〕

「わーい！」

きました。

ひーくんにお腹が空いてお皿に

三〇

「好——」

ひんぱんじく

卷之二十一

ぴーくんは赤くてキラキラしててるソングアメを指さしました。

「マサニラだい？」

卷之三

アマヤがねーーーめたのです。

[...]-[...]-[...]-[...]-[...]

ぴーくんはこわくなつてきました。

それでも泣くのをがまんして、一人で歩

けれど、ぴーくんは転んでしました。

卷之三

お腹が空いたこと、夜に一人で歩いていること、

ひゅう…バンツ!

今まで聞いたことのないような大きな音に、びーくんはもうと泣きだしてしまいました。

二十九

びーくんはわるい子だから、ママにおえないんだー！」



バンツバンツ——

びーくんの大聲よりもやかましく大きな音が足元から聞こえていました。

まわりにいる人たちが見上げて「キレイ」と言っています。

卷之三

夜光虫

つと呂子を見ていました。

W
h
—
!

ひーくんに名前をよにれ

תְּנִינָה

びーくんはママに抱きしめてもう、じりじりた泣きが止まらない。

ボトルをマジックで見失した。

卷之三

「お、アレ、アレだー！」

ぴーくんは赤い花火を指さして言いました。その時、ぴーくんのお腹がなりました。

一
五

卷之三

「たべる―――」

こんどは迷子にならない

